

受け継がれる技術

—畔志賀漁師塾の取組—

畔志賀漁師塾 山内 和

1. 地域の概要

志島地区は、志摩市の阿児町東部に位置する人口 796 人の静かな漁村である（図 1）。志摩地方は古くから都に海産物を納める「御食つ国（みけつくに）」として知られており、豊かな海を利用した水産業や観光業等が営まれている。



図 1 位置図

2. 漁業の概要

志島地区は、三重外湾漁業協同組合に属し、地区の正組合員数は 23 人である。地磯が広がる前浜では、春～夏は海女漁が、秋～冬はイセエビの刺し網漁やナマコ漁が営まれている。素潜りで行う海女漁には女性も多く従事するため、他地区に比べて女性漁業者が多いことが特徴である。

平成 25 年度における志島地区の漁獲量は約 31 トン、水揚額は約 4,500 万円となっている（図 2）。

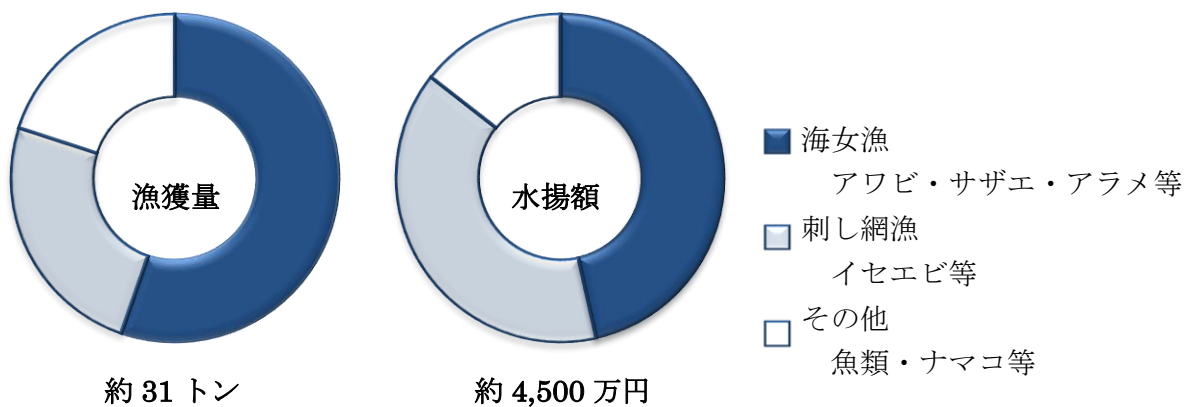


図 2 志島地区における漁獲量および水揚額

3. 研究グループの組織と運営

畔志賀漁師塾（あしかりょうしじゅく）は、漁業の担い手不足という共通課題を持つ畔名、志島、甲賀地区の若手を中心とする14人の漁業者により平成22年に設立され、漁業者としての知識と技術向上のための勉強会の他、私の所属する志島地区では漁業就業希望者の受け入れに取り組んでいる（図3）。



図3 勉強会の様子

4. 研究・実践活動の取組課題選定の動機

かつて、志島地区の漁業技術は親から子のみに受け継がれるものであった。しかし、後継者不足により地区の漁業者は減少してきた。特に、昭和53年に80人いた海女は、平成22年にはわずか14人にまで減少し、地区漁業の消滅を危惧した地区の代表が中心となり、地区外からの就業希望者の受け入れに取り組み始めた。

5. 研究・実践活動の状況及び成果

（新規就業者育成の体制とマニュアル作り）

志島地区に移住した新規就業者は、その日から自分の腕ひとつで生計を立てなければならない。そこで、一日でも早い自立のため新規就業者に先輩漁師を講師として割り当て、指導を行う体制づくりに取り組んだ。

新規就業者の漁業知識、技術は個人で異なり、中には波に酔う者もいる。試行錯誤しながら指導を行い、講師メンバーが話し合う中で、新規就業者に伝えるべきことが整理されてきた。一つは、漁業者間でのルールの遵守、もう一つは、日常生活でのルールである。

磯根資源を利用する海女漁や刺し網漁では、漁業者間の厳しいルールがある。古くから行われている資源管理や、漁業者間のトラブルを防ぐためのルールは、志島地区で受け継がれてきた技術のひとつであり、新規就業者に最初に教える必要がある。

もう一つは、日常生活の指導やサポートである。志島の漁業者になるということは地区の住民になることであり、地区のルールを学ぶ必要がある。ルールといっても、あいさつや助け合い、地区行事への参加といった漁村ではあたり前のことであるが、都市部出身者も多いため、地区住民の協力も得ながら講師がサポートする必要がある。

漁の指導は、刺し網漁では講師の船に新規就業者を同乗させる。講師の指導は親切丁寧なものではないが、漁業者の財産である漁場の位置や網の入れ方等の技術をすぐ近くで見せることで、新規就業者に盗ませ、体得させている。かつて私が指導を受けた際、「分からんことがあればいつでも聞きに来い」と、口数少ない講師からの言葉に助けられた経験から、私が指導する際には、新規就業者から聞かれたことには隠さず全て教えるように心がけている。

海女漁では、講師が所属する海女小屋で新規就業者を受け入れ、先輩全員で面倒を見る体制が構築されている。志島地区ではトマエといわれる船頭の船に乗り合わせて操業するため、漁場では、小屋の先輩全員が不慣れな新規就業者を見守りながら漁をしている（図4）。

また、受け入れる側の現状や課題を整理するため、平成24年度までの取組をまとめた「新規漁業就業者受入マニュアル」を作成した（図5）。



図4 海女漁の様子

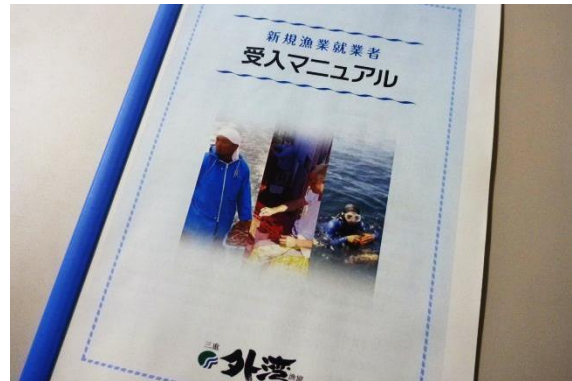


図5 新規漁業就業者受入マニュアル

このような取組により、地区内出身者が新規就業者を育てるだけでなく、地区外から就業した者も新規就業者に対し「技術を継承する」仕組みを確立することができた。そして平成26年度に新規就業した女性3人も含めると現在、40代以下に7人の地区外出身者が加入している（図6）。

私もその7人の一人である。東京都出身の私は、幼いころからの夢であった漁師になるため、10代のころから、他県の遠洋マグロ漁船やまき網漁船で働いた。しかし、自分の憧れる漁師像とは違っていった。その後、一般企業でも約10年間働いたが、自営漁師の夢を捨てきれず、ホームページで見つけた志島の漁師募集に飛びついた。現在34歳、移住後4年目となり、今は、漁師塾メンバーとして、今年の結婚を機に移住し海女となった妻に、海女小屋の先輩の協力を得ながら、海女漁の技術指導を行っている。

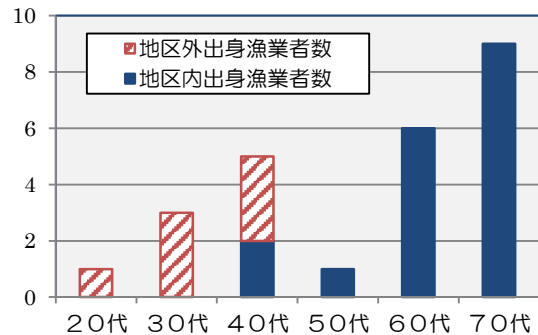


図6 地区外出身者を含む漁業者数（人）

(就業直後の収入問題と解決に向けた取組)

私を含め、地区外から漁業就業した者の経験では、新規就業者が就業直後から自分の腕ひとつで生計を立てていくことは容易ではない。就業直後は、講師から技術指導を受けても海女漁では、「深く潜れない」、「息が続かない」、「単価の良いアワビが（目の前にいても）見つけられない」、しかもやっとの思いで見つけたサザエが採捕制限未満であることもよくある。このため新規就業者の1年目の海女漁での水揚げはせいぜい50万円程度となっている。

私も最初は、80歳を超える先輩海女から、目の前にあるアワビを指さして教えてもらっても岩との区別がつかなかったことを覚えている。2年目になり海女漁にも慣れてくるとより深い場所まで潜ることができるようになり、海女漁で100万円の水揚げをすることができた。刺し網漁では、1年目は講師の船に同乗するため水揚げはない。私の場合は、幸いなことに1年で刺し網の技術を一通り修得できたので、2年目からは中古漁船を購入し一人で操業を行いはじめた。漁船購入早々に、瀬に乗り上げて船底に大穴を空けてしまう大失敗も経験したが、自分の船で漁に出る楽しみを噛みしめながら、なんとか150万円程度の水揚げをすることができた。私が就業した当時は、行政からの支援があり、最初の1年間の生活を維持できたが、水揚げ額が合計300万円を超える3年目までの生活は厳しかった(表)。また、女性の場合は、刺し網漁を行うことはないため、冬期の収入確保が課題となっている。

表 新規就業者の3年間の水揚げ状況

| | 1年目 H23年5月～H24年4月 | | 2年目 H24年5月～H25年4月 | | 3年目 H25年5月～H26年4月 | |
|----------------|----------------------|-------------|----------------------|-------------|----------------------|-------------|
| | 水揚量 (kg) | 水揚額 (千円) | 水揚量 (kg) | 水揚額 (千円) | 水揚量 (kg) | 水揚額 (千円) |
| 海女漁(アワビ・サザエなど) | 466 | 336 | 962 | 1,014 | 918 | 1,213 |
| 刺し網漁(イセエビなど) | — | — | 968 | 1,485 | 1,322 | 2,453 |
| 貝突き漁(ナマコなど) | 11 | 9 | 124 | 101 | 77 | 52 |
| 合計 | 477 | 345 | 2,054 | 2,600 | 2,317 | 3,718 |

この就業直後の収入問題については、漁師塾でも解決に向けた取組をこれまで見いだせていなかった。ある時、海女小屋で暖をとり先輩海女たちと談笑しながらおやつを食べる時に、昔の海女は、栽培したさつま芋で作った自家製の干芋が一番のおやつだったという話を聞き、就業直後の収入安定対策として、平成25年から「きんこ芋」作りに取り組み始めた。「きんこ芋」とは、古くから志摩地方の海女や漁師のおやつとして親しまれてきた漁業とつながりの深い干し芋で、その形がナマコに似ていることから干しナマコを指す「きんこ」の名が付けられている。地区の代表者を通じて、耕作放棄されていた土地約600㎡を借り受け、漁師塾メンバー8人で隼人芋(はやといも)と呼ばれる志摩地方特産の芋の栽培、加工、販売に取り組んだ。作業は、漁の休みの日に出合いで作業を行い、収穫した700kgから約200袋の「きんこ芋」を製造し、一袋700円

でイベントで販売した。漁師の手作り「きんこ芋」という話題性もあり、好評のうちに完売することができ、合計14万円の収入を得ることができた。現状では、収入安定対策とまではいっていないが、今後も継続して取り組む予定である(図7)。

また、漁業者による「きんこ芋」づくりの取組が地域で話題となり、私たちの取組に理解のある地元海藻加工会社によるパートタイム募集や、漁協による移動鮮魚販売の手伝いといった臨時雇用も行われるようになり、各方面から協力を得られる状況となってきた。



図7 「きんこ芋」

6. 波及効果

近隣からは、志島地区には若い者が増え、地域が明るくにぎやかになったという話を耳にする。また、地区の代表者からは「お前たちがココで頑張っているので地区の年寄りたちにも活気が出てきている」と言われることがある。若者が就学や仕事のため地区を離れてしまい地域が過疎化する事例がテレビ番組や雑誌等で紹介されている昨今、私たちのように漁業に就業するために移住した者が結婚し、志島地区に家庭を築いていくことも地域貢献の一つではないか考えている(図8)。



図8 海女小屋での様子

また、多くの漁村で漁業後継者不足が課題となっているが、地区外から就業希望者を受け入れる取組は、地区内での合意形成や受入態勢の整備等の問題により、解決に向けた取組を行うことは難しいようである。志島地区の少ないながらも自営漁業者が育ち定着している取組は、同じ課題を持つ他地区の参考になると思われる。

7. 今後の課題や計画と問題点

漁師塾の取組により、地区外の就業希望者を受け入れ、技術を継承するための仕組みは確立されつつある。しかし、女性新規就業者については、冬期の収入問題が解決されず、今後は地域とともに水産物を活用した加工品や総菜の製造販売等の6次産業化にも挑戦し、女性漁業者の収入問題の解決と水産物の消費拡大に取り組みたい。

また、磯根資源を対象とする漁業が中心の志島地区では、資源量に配慮しつつ漁村の多面的機能維持に必要な漁業者数の確保に取り組みつつ、魅力ある地域の漁村復興に取

り組む全国の仲間と活動を広げ、漁業に魅せられた者として、日本の魅力ある漁村の伝承に努めたい。